

# 地水火風は生きているか？

## ——「ジャイナ教＝アニミズム」説の再検討——

堀 田 和 義

### 1. はじめに

インドの諸宗教のうち、ヒンドゥー教、仏教などの文献では、地水火風は無機的な元素として扱われるが、ジャイナ教では生き物として扱われている<sup>1)</sup>。かつて、ジャイナ教文献に見られるこのような記述はアニミズム的であると解釈されることがあった（以下、「ジャイナ教＝アニミズム」説と呼ぶ）。一方で、それに異を唱える研究者も多く、様々な反論がなされてきた。

本稿では、最初に「ジャイナ教＝アニミズム」説を唱える研究とそれに対する批判を概観し、先行研究とは異なった視点から問題点を指摘する。そのうえで、「ジャイナ教＝アニミズム」説に対するいくつかの批判のうちの一つを、*Tattvārthādhigamasūtra* (TAAS) を中心とする文献の記述に基づいて検討する。

### 2. 先行研究概観

「ジャイナ教＝アニミズム」説の存在は先行研究でしばしば言及され（例えば、Jain 1935, p. 141, 金倉 1944, p. 119, Sangave 1980, p. 199<sup>2)</sup>, 藤永 1990, p. 59, Shah 2004, p. 48, 渡辺 2005, p. 163, 杉岡 2013, p. 97 等を参照）、藤永 1990 では Jacobi 1884<sup>3)</sup> と金倉 1944 を、杉岡 2013 ではそれに加えて Schubring 1962 を挙げている<sup>4)</sup>。特に、Jacobi は他の著書 (Jacobi 1906<sup>5)</sup>, Jacobi 1946<sup>6)</sup>) においても繰り返しそのことに言及する。金倉 1944 も Jacobi 1906 を参照しており、同様のことを述べる Stevenson 1915 もしばしば Jacobi 1884 に言及しているため<sup>7)</sup>、先行性やジャイナ教研究における影響力などを考慮しても、「ジャイナ教＝アニミズム」説は、Jacobi のものが代表的なものと言えるだろう<sup>8)</sup>。

「ジャイナ教＝アニミズム」説に対しては、Jain 1935<sup>9)</sup>、渡辺 2005<sup>10)</sup>、杉岡 2013<sup>11)</sup> などがそれぞれの立場から批判しており、藤永 1990 は、「アニミズム」の定義が曖昧である点を意識して、慎重に2通りの解釈を挙げている<sup>12)</sup>。先行研究

で指摘されていない問題点としては、「アニミズム的であること」が「古いこと」の根拠とされている点があるか<sup>13)</sup>、近年では批判されている「アニミズム → 多神教 → 一神教」という進化説を前提としており、再考を要する。

「ジャイナ教＝アニミズム」説を批判する先行研究の中でも、「ジャイナ教は生命体と非生命体を峻別しているので、『すべてのものが生命体 (soul) を備えている』という意味でのアニミズムではない」と述べる Jain 1935 の見解は、他の研究と違って具体例を挙げていない。そこで、以下においては、Jain 1935 の見解を TAAS の記述に基づいて検討するが、本稿では Jain 1935 の定義、および Jacobi が animism と並んで hylozoistic という言葉を用いている点を踏まえて、「無生物も含むあらゆるものに生命を認める」という点をアニミズムの定義とみなす。

### 3. TAAS から見た地水火風

#### 3.1. 生き物としての地水火風

最初に、TAAS 第2章の記述を確認しておきたい。ここでは、生命体 (jīva) を輪廻する者と解脱した者とに分類し、地水火風は、そのうちの輪廻する者の下位区分である動かない者に含まれる（空衣派刊本では、火と風も動く者に含める）。地、水、植物、火、風は、TAAS 2.23で、1つの感覚器官を備えた者であると述べられている（空衣派刊本では、植物までを含める）。

また、2～5つの感覚器官を備えた者の例としては、TAAS 2.24で、それぞれ虫、蟻、蜂、人間が挙げられている。つまり、地水火風は輪廻する存在であり、1つの感覚器官を備え、レベルの差はあるものの、虫から人間にいたる生き物と同列に論じられている。

#### 3.2. ジャイナ教における地水火風の位置付け

ジャイナ教の教義の根幹とも言えるものに生命体、非生命体 (ajīva) 等の7つの原理がある<sup>14)</sup>。そして、非生命体には5つの下位区分、すなわち、進行の補助因 (dharma)、停止の補助因 (adhama)、空間 (ākāśa)、物質 (pudgala) がある<sup>15)</sup>。

ただし、非生命体でも、進行の補助因、停止の補助因、空間には生命体が宿らない。これは、物質以外は身体を構成しない点と関係する。死によって生命体が身体から出ていき、生命体が宿っていない状態の非生命体があるという学説からも、物に常に生命体が宿っているわけではないことがわかる<sup>16)</sup>。生命体が物質由来の地水火風を身体としていることをもって「アニミズム」と呼ぶならば、同

じく物質由来の身体を持つ人間などを指して「アニミズム」と呼ばねばならないだろう。

### 3.3. ジャイナ教の原子論

物質は原子 (aṇu) と集合体 (skandha) に分類されるが、ジャイナ教では原子が1種類しかなく、原子レベルで地水火風の別を認めるヴァイシェーシカ学説などと大きく異なる。

それでは、原子が共通であるのに、地水火風の別はどのように生じるのか。残念ながら、TAASとその注釈の説明の力点は結合と分割の起こる過程の説明にある。管見の限りでは、*Dravyālaṃkāra* (DA) と *Dravyālaṃkāraṭīkā* (DAT) が<sup>8</sup>、わずかにこのあたりの事情に触れている。そこでは、ヴァイシェーシカ学説と思われる「感触などのすべてが、あらゆる物質に存在するわけではない」という反論に答えて、おおよそ次のように述べる。

(a) 地<sup>9</sup>が、感触、味、におい、色を持つように、水なども感触、味、におい、色を持ち、そのうちの発現したもの (= 認識で確定できるもの) が把捉される。存在するすべての物が、凡人の認識で把捉されるわけではない<sup>17)</sup>。

(b) 物質は、ある時は地のあり方を捨てて、水、火、風のあり方を、ある時はそれら (= 水、火、風) のあり方を捨てて、地のあり方を獲得する<sup>18)</sup>。

ただし、地水火風の別は原子レベルであるのか、集合体レベルであるのかといった点や<sup>19)</sup>、ヴァイシェーシカ学説を思わせる「発現 (udbhava) 説」の起源等は不明であり、今後の課題としたい。

## 4. むすび

ここまでで論じたことの要点をまとめて、本稿のむすびとしたい。

- (1) ジャイナ教研究の初期 (特にヨーロッパの研究者) に「ジャイナ教 = アニミズム」説が見られ、Jacobi の説が代表と考えられる。そして、その見解は様々な角度から批判されている。
- (2) 「ジャイナ教 = アニミズム」説と並んで、「ジャイナ教がアニミズム的 → ジャイナ教は古い」という見解も見られるが、これは近年批判されている宗教進化説を前提としており、再考を要する。
- (3) TAAS の記述を中心に確認する限り、次の点が明らかであり、Jain 1935 の見解も「ジャイナ教 = アニミズム」説の反論として有効である。

- (3-1) 「ジャイナ教＝アニミズム」説は、そもそも「地水火風＝無生物」という一方的な前提に立っているが、ジャイナ教における地水火風は、人間などと同列の生き物であり、輪廻する存在である。
- (3-2) 非生命体でも、物質以外の進行の補助因、停止の補助因、空間には生命体が宿らない。
- (3-3) 生命体が物質由来の地水火風を身体としていることを「アニミズム」と呼ぶならば、同じく物質由来の身体を持つ人間などを指して「アニミズム」と呼ばねばならない。

1) ジャイナ教聖典では、例えば、*Sīyagāḍa* 1.11.7–11, *Dasaveyāliya* 第4章等、聖典期以降のものとしては、例えば、*Tattvārthādhigamasūtra* (TAAS) 2.10–14, *Ratnakaraṇḍaśrāvākācāra* (RK) 80等。初期ジャイナ教の六生類に関しては、杉岡2006, 2007, 2009, 2013, 2016等を参照。2) ただし、Sangave 1980の見解は、Jain 1935にもとづくものである。また、Shah 2004も Jain 1935, もしくは Sangave 1980にもとづくものと考えられる。3) Jacobi 1884, xxxiii。ここでは、animistic (アニミズム的)ではなく、hylozoistic (物活論的)という言葉が用いられている。4) Schubring 1962, p. 15 §10。ドイツ語版 (Schubring 1935) では p. 12 §6。5) Jacobi 1906, p. 303。6) Jacobi 1946, p. 84。7) Stevenson 1915, p. 89。また、Radhakrishnan 1929や Jain 1935は、Colebrookeの言葉を引くが、該当箇所 (*Miscellaneous Essays* II, p. 276) には見当たらない。ただし、そこで「ジャイナ教＝アニミズム」説に言及していることは、Radhakrishnan 1929, p. 291の記述から推測できる。8) 他にも Alsdorf 2010 (ドイツ語版は1962年) p. 15などにも見られる。また、Flügel 2012はジャイナ教の教義をアニミズムのと捉えたいうえで現代的な意義を探っているが、「ジャイナ教＝アニミズム的」という点に関する批判的な態度は見られない。9) Jain 1935, p. 141. Sangave 1980, Shah 2004の見解は、Jain 1935に従う。10) 渡辺2005, p. 163, および p. 262以下。11) 杉岡2013, p. 98。12) 藤永1990, pp. 59–60。13) 注4に挙げた Schubring 1935, p. 12 §6, 注7に挙げた Stevenson 1915, p. 89, Radhakrishnan 1929の紹介する Colebrookeの説等を参照。Stevenson 1915, p. 97, n. 4では、Jacobi 1884, p. xxxiiiの記述もジャイナ教が古いことを述べていると考えるが、ここでの趣旨はジャイナ教そのものの古さよりも、ジャイナ教が仏教起源ではないことであろう。14) TAAS 1.4。15) TAAS 5.1。このような生命体と非生命体の区別は、聖典にも見られる (例えば、*Uttarajjhāyā* 第36章)。この点については、杉岡2014, p. 490等を参照。16) この点については、*Sarvārthasiddhi* 2.3にもとづく藤永1990, p. 59の説明を参照。17) DAT, p. 14。18) DAT, p. 14。19) 「凡人の認識では把握できない」という発現説の導入は、世俗的には、原子レベルで地水火風の別を認めるのに等しい。一方、クンダクンダの *Pañcāstikāya* (PAS) 78では原子について「4つの元素の原因である」と述べており、元素を集合体レベルと考えていると思われる。

〈略号〉

TAAS *Tattvārthādhigamasūtra of Umāsvāti*. Ed. Keśavalāla. Bibliotheca Indica, no. 1044. Calcutta: Asiatic Society of Bengal, 1903. DA *Dravyālaṃkāra of Rāmacandra and Guṇacandra*. Ed. Jambuvijaya. L. D. Series, no. 126. Ahmedabad: L. D. Institute of Indology, 2001. DAT → DA

PAS *Pañcāstikāya of Kundakunda*. Ed. Manoharalāla. Śrīrājacandrajainaśāstramālā. Agās: Śrīmadrājacandra Āsrama, vi°saṃ°1961. RK *Ratnakaraṇḍaśrāvakačāra of Samantabhadra*. Ed. Jugalakiśora Mukhtāra. Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā, no. 24. Bombay: Māṇikacandra Digambara Jaina Granthamālā Samiti, vi°saṃ°1982.

〈参考文献〉

- 金倉圓照 1944『印度精神文化の研究——特にジャイナを中心として——』培風館。  
 風——』『宗教研究』79(4): 1213-1214。—— 2007「ジャイナ教の修行と生活」『宗教研究』80(4): 935-936。—— 2009「ジャイナ教の自然観」『宗教研究』82(4): 1023-1024。—— 2013「初期ジャイナ教の生物観——霊性を共に生きる——」『宗教研究』86(4): 819-820。—— 2014「初期ジャイナ教と初期仏教の諸問題——生き物、不殺生、慈悲——」『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』佼成出版社, 490-499。—— 2016「ジャイナ教の六生類——satthaとdaṇḍa——」(第31回ジャイナ教研究会発表資料, 大谷大学, ジャイナ教研究会, 2016年9月24日)。藤永伸 1990「ジャイナ教の生命観」『日本仏教学会年報』55: 57-68。渡辺研二 2005『ジャイナ教非所有・非暴力・非殺生——その教義と実生活——』論創社。Aldorf, Ludwig. 2010. *The History of Vegetarianism and Cow-Veneration in India*. Trans. Bal Patil. London: Routledge。Flügel, Peter. 2012. "Rethinking Animism: The Jaina Doctrine of Non-Violence from the Perspective of Comparative Ethics." *Jaina Studies* 7: 8。Jacobi, Hermann. 1884. *Gaina Sūtras*. Part II. The Sacred Books of the East, vol. 45. Oxford: Clarendon Press。———. 1906. *Eine Jaina-Dogmatik: Umāsvatī's Tattvārthādhigama Sūtra*. Leipzig: F. A. Brockhaus。———. 1946. *Studies in Jainism (Part one)*. Ahmedabad: Jaina Sahitya Samsodhaka Karyalay。Jain, J. C. 1935. "The Conception of Soul in Jainism." *The Indian Historical Quarterly* 11: 137-141。Radhakrishnan, S. 1929. *Indian Philosophy*. Vol. 1. Reprint, Delhi: Oxford University Press, 1997。Sangave, Vilas Adinath. 1980. *Jaina Community: A Social Survey*. Popular Library of Indian Sociology and Social Thought, vol. 2. Bombay: Popular Prakashan。Schubring, Walther. 1935. *Die Lehre der Jainas*. Berlin and Leipzig: Walter De Gruyter。———. 1962. *The Doctrine of the Jainas*. Trans. Wolfgang Beurlen. Lala Sundarlal Jain Research Series, vol. 15. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers。Shah, Natubhai. 1998. *Jainism: The World of Conquerors*. Vol. 2. Brighton: Sussex Academic Press. Reprint, Delhi: Motilal Banarsidass, 2004。Stevenson, Sinclair. 1915. *The Heart of Jainism*. London: Oxford University Press。

(平成29年度科学研究費16K16699による研究成果の一部)

〈キーワード〉 Hermann Jacobi, hylozoistic, *Tattvārthādhigamasūtra*

(大谷大学真宗総合研究所特別研究員, 博士(文学))